

神奈木智

イラスト◆穂波ゆきね

キスなんて、 大嫌い

SATORU・KANNA Aoi・PREU・KANNA

2000年8月31日 初刷

著者 神奈木智

発行者 松園光雄

発行所 株式会社徳間書店

〒105-8055 東京都港区東新橋 1-1-16

電話 03-3573-0111 (大代表)

振替 001400044392

■初出一覧

キスなんて、大嫌い…………Chara(1999年4月号)
そして、キスが始まる…………書き下ろし

Chara

キスなんて、大嫌い…………

◀キャラ文庫▶

印刷・製本 大日本印刷株式会社

カバー・口絵 真生印刷株式会社

デザイン 海老原秀幸

定価はカバーに表記してあります。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
乱丁・落丁の場合はお取り替えます。

©SATORU KANNAGI 2000

ISBN4-19-900149-2

Chara

キスなんて、大嫌

神奈木
智

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

目次

キスなんて、大嫌い 5

そして、キスが始まる 113

あとがき 244

キスなんて、大嫌い

口絵・本文イラスト／穂波ゆきね

キスなんて、大嫌い

今まで見た人間の中で、一番可愛い。

浅野唯月あさの ゆづきの泣き顔を目にした時、永瀬緑なが せりよくが真つ先に漏らした感想はそれだった。

まつ毛の端に光る、透明な水の粒たち。それらが茶色がかった薄い黒目を神秘的に輝かせ、緑の目にはまるでサテンのようにきらきらと映って見える。唯月のへの字に曲げた唇はぷっくりと愛らしく、薄く赤みを帯びた頬ほおはツヤツヤの球体を思わせた。

(どこから、きたのかな……)

緑を含めて教室の皆はお揃いそろの園児服を着ているというのに、先生に連れられて入ってきた唯月ときたら、まるきり家にいる時のような普段着なのだ。

(なんで、あんなにないてるんだろう)

ここには友達もいっぱいいて、受け持ちの桜先生さくらは若くて美人でとっても優しい。緑に言わせればそれだけで世の中はバラ色に思えるのに、唯月はまるでこの世の終わりのような悲壮な顔つきでジッと皆を睨にらみつけている。

(だけど、ほんとに、かわいいなあ)

緑は最近覚えた、両肘りょうひじをついた上に顎あごを乗せるという行儀の悪いポーズを取りながら、うつとりと目の前の魅力的な泣き顔に見入った。

幼い緑の認識の中で、今まで一番の美人は母親ということになっていた。事実、独身時代にモデルをしていたという母は世間的にも美しいと言われていたし、母親譲りの美貌びぼうに恵まれた緑は、「大きくなったら、きっと凄くすごカッコ良くなる」と周囲の大人たちから太鼓判を押されているくらいだ。

だが、たった今から緑はその認識を改めることに決めた。何故なら、挑戦的な目つきで泣き続けている唯月ほど、緑をときめかせた人間はいなかったのだから。

(…ひっこしてきたのかな。おともだちに、なりたいな。となりに、すわりたいなあ)

唯月を見ているだけで緑の夢はどんどん膨らみ、拳句の果てには「けっこんしたい」とすら思った。結婚すればずっと同じ家に住めるし、大人になっても離れないでいられる。普通、結婚は女の人とするものだが、唯月はこんなに可愛いんだから特別に許してもらいたい。

熱心に考えているうちに、緑の鼓動はドキドキと甘く波打ち始める。だが、このときめきをまさか十年以上も自分が大事に抱え続ける運命になるとは、さすがにまだ五歳の彼には予想すらできなかった。

「あさのゆづき。なかよくしてください」

拗ねたような声で唯月が頭を下げると、パチパチとあちこちから拍手が鳴り響く。それは、緑の長い長い片想いの始まりを告げる鐘の音でもあった――。

眠る唯月の顔を見つめて、緑はしみじみと（やっぱり好きだなあ）と思った。

春休み最後の夜、部屋の壁には二着の真新しい中学の制服が並んでかけられている。唯月の部屋に泊まりにくるのは今日が初めてではないが、月が明るすぎるせいかなんだか寝つけなくて、緑だけ布団から起き上がってしまった。

明日は、中学の入学式だ。けれど、緑の母親はどうしても仕事の都合がつかなくて、母子家庭である彼の家からは誰も付き添ってくれる人がいなかった。

「それなら、俺も一人でいい。一人で行く」

緑の事情を知った唯月がそんなことを言い出し、一時は唯月の両親も困惑したようだったが、結局は「じゃあ、緑くんと一緒に二人で行きなさい」ということになったのだ。明日の朝には、唯月の母親が特製のオムライスを作って送り出してくれる予定だった。

唯月と出会ってからの七年間、緑の世界はまさしく唯月一色だったが、それは多分向こうも同じだっただろう。彼らはお互いの顔を見ないで過ごす日は滅多になかったし、相手に秘密を

持ったことも一度もない。

ただし、緑の胸に潜む小さな想い以外は、の話だ。

だが、月に照らされた寝顔を見ているうちに、緑は唐突に決心をした。一刻も早く、唯月に打ち明けてしまおう。自分が、どんなに彼を好きでいるかって。どれくらい、大切に想っているかって。

（唯月、喜ぶかな…喜ぶに決まってるよな）

緑は告白の先に待っている唯月との甘い日々を想像し、とても幸せな気分になった。そこでようやく眠気が訪れ、彼は唯月の隣に潜り込むとそのまま安らかな眠りについた。

ところが。

「だって、俺たちどっちも男じゃないか」

一番言われたくないセリフを口にして、唯月は「ごめんな」と付け加える。まさかの展開に緑が絶句していると、彼の沈黙を待つように空から桜が舞い落ち、真新しい学生服に包まれた二人の肩口へ降りかかった。

「でも…だけど…」

納得できない緑は、それでも懸命になってなんとか言葉を搜し出す。

「唯月、昨夜だって言ってたじゃないか。俺が…緑が大好きだって。だから、緑さえいれば入

学式は一人でも全然いいって。だったら……」

「俺は……」

「え？」

一瞬ためらった後、唯月はゆっくりと緑へ言い聞かせるように言った。

「俺は、緑を親友だと思ってるんだ。緑とは幼稚園の頃からの付き合いだし、もちろん好きに決まってる。でも、恋って意味じゃないよ。だって、恋って女の子とするもんだろう？」

「それは……そうだけど……」

「緑、おかしいよ。俺もおまえも、両方男なのにさ。恋人なんて、なれっこないじゃん」

「だけど……」

だけど、好きなんだからしょうがないじゃないか。

続く言葉を飲み込んで、緑は戸惑いの色を浮かべた唯月の瞳を覗き込む。

初めて唯月を見た瞬間から、ずっと緑の一番は彼だけで、他のどんな人間も心に住み着くことはなかった。それに、緑は一度も唯月から「好きな子がいる」と打ち明けられた覚えがない。二人の間に秘密はないはずだから、彼に好きな女の子がいないのは確かなのだ。

それもこれも、自分を想ってくれている故だと緑は信じていたのに、このつれない返事はどうしたことだろう。入学式が済むのを待ちかねるようにして唯月を誘い、張り切って人気のない裏庭へ引っ張ってきたのは、決して振られるためなんかではない。

今や、緑が瞼に描いたバラ色の中学生生活は儚い夢となりかけていた。

「緑……あのさ……」

言葉をゆつくり選びながら、あくまで毅然とした口調を崩さずに唯月は言った。

「俺、恋とか愛とか、まだ真面目に考えたことがないんだ。だけど、できれば恋愛は女の子としたいと思う。それに、緑とは女の子とじゃできない付き合い方がしたいんだ。だから、今まで通りいい友達でいたい。それじゃ、ダメか？」

「……………」

「緑？」

返事もなく項垂れる緑を、心配そうに窺う気配がする。はなはだ心外な事実だったが、唯月は緑より五センチも背が高いため、眼差しがツムジへ温かく降り注がれるのを彼は感じた。

身長差のせいか、それとも緑があまり賑やかな家庭とは縁のない生活をしているせいか、唯月はこうして時々保護者のような態度で緑へ接する時がある。それが、彼の持つて生まれた義侠心の表れであることは、幼いながら緑にも理解ができた。

しかし、緑は保護者ではなく恋人が欲しい。

親友ではなく、恋人の浅野唯月が欲しいのだ。

「頼むから返事してくれよ、緑」

「……………」

「なあ、俺たちずっと親友でいよう？」

それが嫌だから、告白したんだよ。

緑はそう言い返したかったが、強張った唇は残念なことに上手く動かなかった。

「困ったなあ……」

ため息混じりに唯月が呟き、桜の散る様へ視線を移す。

緑が最初に見込んだ通り、身長以外は何もかも可愛く可愛く成長した唯月だったが、甘い外見とは裏腹に彼は男気に満ちたきっぱりとした性格をしている。その彼が、緑にだけは柔らかな声を聞かせ、あどけない笑顔を見せるため、つい彼も自惚れてしまうのだ。

緑だって、唯月をもっと健全な目で見られたら、と思ったこともある。けれど、目の前の罪作りの笑顔と声が、いつも緑の努力を簡単に挫いてしまうのだった。

「……俺さあ、緑がそんな風に俺を見ていたなんて、ちつとも気がつかなかったんだ。だから、いきなり好きだとか言われても……」

「じゃ、今から考えてくれよ。今まで気がつかなかったんなら、これでハッキリわかっただろう？ 俺は、唯月が好きなんだ。大好きなんだ。恋人になりたいんだよ」

「そ、それはもうわかったって」

「唯月が言った通り、男に恋するなんて確かに俺はどうかしてると思う。思うけど、ダメなんだ。だって、ずっと唯月だけが好きだったんだから……。男とか女とか、そんなの関係ない。こ

の七年間、唯月しか目に入らなかった」

「でも、おまえ女の子に人気あるのに……。こないだのバレンタインだって、女の子から四十個もチョコ貰^{もら}ってたじゃないか」

その通りだ。自慢じゃないが、ルックスのいい緑は本当によくモテる。だが、「唯月しか目に入らない」彼は、バレンタインを誕生日に持つ唯月と貰ったチョコを山分けし、こっそり自分からのチョコまで紛れ込ませておいた。あの時も唯月は無邪気に喜ぶばかりで、はしゃぐ横顔を切なく見つめる緑の想いになど気づきもしなかったに違いない。

「とにかく」

と、唯月は言った。

「俺は、これからも緑とは友情を築いていくって決めてるんだ。だから、ダメー」

「ダメって、おい唯月……」

「シッ。まずいぞ、緑。チャイムだっ」

食い下がる緑を遮^{さへぎ}って、唯月が人差し指を唇へ当ててくる。緑は思わず胸を高鳴らせたが、唯月はさっさと指を引っ込めると、校舎へ向かって駆け出そうとした。

「おい、唯月！ 待てよ、まだ話は済んでないだろうっ」

「いくら聞いても、一緒なんだよっ」

「だったら！ だったら、もう一度だけチャンスをくれよ！」

唯月は知らないだろうけど、マ

ジですっとおまえが好きだったんだ。七年だぞ、七年！　なのに、ほんの五分か十分で終わりにするなんて、あんまり冷たいじゃないか！」

「それは…そうかもしれないけど…」

一理あると思ったのか、唯月の返事が不意に弱々しくなる。ここぞとばかりに、緑は必死になって次々とセリフを畳みかけた。

「そうだろ？　だったら、もう一度チャンスをくれ。今すぐ気持ちを变えろって言っても無理だろうから…そうだ、あと六年。俺、あと六年待つよ。な？」

「ろ、六年って、おまえ気軽に言うけど、六年後には俺たち十八歳になってるんだぞ？」

「十八歳！　いいじゃないか、十八歳！　それに、十八っていったら男も結婚できる年だもんな。うん、決めた。そうしよう」

「…あのな、緑。たとえ百万分の一の確率で俺たちが両想いになったとしても、気の毒だけど男同士で結婚するのは無理だよ？」

「へ？　バ、バカ言え。軽い冗談に決まってるだろっ」

どうだか…と怪しむ唯月の視線から逃れ、緑はキリツと背筋を伸ばすと、青空を仰いで六年後の自分たちへと思いを馳^はせた。

「そっかあ…十八かあ…」

「緑。おまえ、もしかして十八になったら俺と付き合えるって、頭から決めてないか？」